

書評

市川紘司『天安門広場 —中国国民広場の空間史—』

小野寺 史 郎

I

本書は著者が東北大学大学院工学研究科に提出した博士論文を元にしたものである。ただ題名から多くの読者が予想するであろう内容とは異なり、中華人民共和国の天安門広場を中心に扱ったものではない。本書が主な対象とするのは、その名がつけられる以前の「前日譚」にあたる中華民国期にこの空間がたどった変化や曲折の過程である。

本書は500頁に迫る大著であり、内容も非常に豊富かつ多岐にわたる。そのため以下ではまず全編を通じて論じられるテーマを中心に、ごく簡単に各章の内容を紹介したい。

序章「「革命史観」からこぼれ落ちた歴史」は、既成の天安門広場史がもっぱら明清時代の「宮廷広場」と1949年以降の「国民広場」の対比という図式で語られており、そのような「正史」からは間の中華民国期が抜け落ちていることを指摘する。そして「新中国の国民広場である天安門広場の、いまだ語られざる「近代」を明らかにすること」(31頁)を本書の目的に掲げ、1949年を「重要な経過点」と位置づけつつ「それを連続性のなかで包摂するような歴史」(32頁)を目指すとする。

第1章「禁地開放」は、清代の宮廷広場としての天安門広場の構造、そこで行われた王朝儀礼の内容、そこが紫禁城と同じく壁で囲まれ一般人の立ち入れない「禁地」であったことなどを説明する。しかし中華民国成立後の1913年に広場は一般の人々の通行に開放された。後に通用門も増やされたことで広場は市街地に溶け込む交通結節点へと変貌した。この背景には、交通量の増大に伴い、北京全体でも既存の門の開放や通用門の新設、城壁の撤去が行われていたこと、王朝の儀礼施設の公園への転用が進められていたことなどがあった。ただ天安門広場は引き

続き紫禁城と一体化して隆裕太后の「国民哀悼会」や袁世凱による国慶節の観兵式といった儀礼に利用される場合もあった。特に後者は最高権力者が天安門上で儀礼を行った最初の事例となった。

第2章「広場を奪い合う——五四運動とその後——」は、第1章で見た天安門広場の「物理的＝客観的側面」の変化に続いて起きた「心理的＝主観的側面」の変化を論じる。1919年の五四運動の学生デモは天安門前から始まった。1925年の五三〇事件の際の北京のデモやその後の集会でも天安門広場は利用されたが、学生に市民も加わり、集会の規模や頻度は増していった。なお集会の特徴として天安門ではなく仮設の演説台が使われたことがあげられるが、これは参加者の一体感を損なう高低差のためだったと考えられる。デモにおいて天安門広場が市街空間と一体的に用いられたことは、広場とその周辺の関係性の反転を示す。一方で政権側もさまざまな手段で天安門広場の使用を管理しようとしており、この時代の天安門広場は「民間の政治運動と政府の統治権力が先鋭化する政治闘争の空間」(139頁)であった。北伐後に北京を統治した中国国民党も天安門広場を利用し、民間の自主的な「社会運動」に代えて党主導の「動員集会」をそこで行った。

第3章「揺れる位置づけ——1920～30年代の建設と計画——」は再び天安門広場の物的構成を論じる。北京政府期の京都市政公所の下では天安門広場の緑地化・公園化が進んだ。北伐後の北平市政府はこの空間を中山路・中華路と名づけたが、南京遷都による経済危機の中、そこを「模範街区」として開発するか、観光資源として保存するかで意見が対立した。北平世論は後者を支持し、実際に観光地化計画も進められたが、天安門はその目玉とは位置づけられなかった。また紫禁城を故宫博物院に管轄させた際、天安門広場もそこに編入されたが、以後も実際には市街地として用いられ続けた。このように位置づけが曖昧だったことから、この時期に天安門広場が大きく改変されることはなかった。

第4章「メディアとしての天安門」は、天安門への政治指導者の肖像画設置をやはり民国期からの連続性で捉える。最初の事例は北伐後数年間、孫文の遺像と遺囑などが描かれていたもので、交通要衝空

間である天安門広場を用いて統治体制の転換を示そうとしたものだった。また日中戦争後には同所に存命の指導者である蒋介石の肖像が掲げられ、北京「解放」後も儀礼の際に人民解放軍の指揮官たちや毛沢東の肖像が設置された。これは国共両党に共通する政治文化だった。国民党は北京中枢部の公共空間である天安門広場を孫文の記念空間とすることで統治の正統性を示そうとしたが、銅像建立が資金難で頓挫し、また日中戦争中に北京が占領されたことなどから、その目論見は短命に終わった。戦中の中華民国臨時政府は天安門広場ではなく管理の容易な故宮内の太和門前広場を集会イベントに主に使用し、天安門は標語の掲示や周知に用いた。このように天安門のメディアとしての使用法は異なる主体間で継承された。

第5章「1949年に切断線を引く——中国共産党とその「空間政治」——」は、中国共産党が首都とした北京を改造し新たな統治体制を可視化していった過程を見る。共産党は故宮の保存と五四運動の重視から天安門広場を建国セレモニーの会場としたが、仮設演説台ではなく天安門を使ったのは北京政府期に近かった。このセレモニーは以後の毎年の観兵式・群衆パレードの雛形となった。反復されたセレモニーは、天安門広場に対する歴史認識を1949年で切断し「正史」を作り出していく決定的な役割を果たした。1958年に完成した人民英雄紀念碑も、諸アクターによる紆余曲折の過程だった中国近代史を「新中国」成立に向かう革命史へと再構成するものであり、国民を統合する「無名戦士の墓」だった。天安門自体も国章のメインモチーフに採用されたことで、歴史的建造物から革命闘争と新中国のシンボルへと意味づけを変えていく。

第6章「東西軸の創出、南北軸の延伸」は戦中・戦後の北京の都市計画を紹介する。日本は占領下の北京で、城内の歴史的建造物は保存し、東西郊外に新市街地を設けるという都市計画を策定した。天安門広場は美観地区と位置づけられ、東西の長安街を接続し東西の新区を結ぶ軸として延伸することが初めて構想された。人民共和国成立後、北京はソ連の専門家の指導下で再開発されることになったが、そこで今度は中軸線を紫禁城の北にまで延伸すること

が初めて提案され、天安門広場は二本の都市軸が交錯する全市の中心となった。スターリン批判の影響などで北京の都市計画はその後曲折を経たものの、最終的に1959年に天安門広場はT字型から矩形に拡張され、東西に革命歴史博物館と人民大会堂が建てられて現在に近い姿となった。

終章「施設」以前・以後」は以後の天安門広場改造の計画とそれが実現しなかった理由を述べる。文化大革命の中で天安門に毛沢東の肖像が常設されるようになり、神聖不可侵のシンボルと見なされるようになったことで、1960年代の故宮改造計画は否定された。改革開放後に提案されたいくつかの整備計画も実施されず、広場は変化を止める。著者はこれを天安門広場が生きた有機体としての都市空間から、「制度」と一体化した「施設」となったためとする。ただ20世紀前半においては、政治的不安定やさまざまなアクターの関与のため、天安門広場の「近代」は緩慢で迂余曲折に満ちたものであり、国民広場としての姿はその歴史的な蓄積のなかに位置づけられると結論する。

なお瑕疵というほどではないのだが、「清室優待条件」(80頁)について「清朝優待条約」(60頁)、「清朝優待条件」(77頁)など表記に揺れがあったのは若干気になった。旧字と新字の使い分けの基準もややわかりにくい。また「馮国祥や張作霖らが北京政府の代表の座に」(90頁)とあるのは馮国璋の誤記、「馮国祥による「北京政変」」(60頁)、「景山に駐屯する馮国祥軍隊」(134頁)とあるのは馮玉祥の誤記であろう。同様に「北平政治分会主席・張縉」(216頁)は張繼(継)の、「画家の許悲鳴」(315頁)は徐悲鴻の誤記である。ただ、それ以外では中国史研究者でも間違いがちな固有名詞や用語なども含め総じて非常に正確に記述されているのも本書の特徴と言える。

II

著者の専門はアジアの建築都市史だが、中国近現代史を専門とする評者が本書を一読して感じたのは、日本、中国語圏、英語圏の、建築史にとどまらない広範な歴史研究に対する、著者の体系的な理解である。大量の新聞・雑誌、公刊された史料集、そして

檔案(公文書)を駆使するスタイルも、まさしく現在の中国近現代史研究のそれである。しかしその一方で、読みやすい軽快な文体、模式図の多用、そして空間に対する分析視角は評者の目には非常に新鮮なものと映った。ひるがえって自らが著者の専門分野である建築史について知るところが少ないことを恥じるばかりであり、ふだんいかに限られた範囲の研究しか目にしていないかを痛感させられた。このように評者に本書を評する能力があるかははなはだ疑わしいのだが、以下ではあくまで中国近現代史研究者からのものという限定つきで、本書に対する感想を述べさせてもらいたいと思う。

中国近現代史研究から見た場合、本書の意義は次のいくつかの視角から評価することができる。

一つは都市史である。本書内でも触れられているように、清末・民国期に急速な変化を遂げた上海や天津、青島、あるいは植民地統治下の香港・台湾やマンチュリアの都市に関しては、日本でも社会・経済・政治・外交・文化・メディアといった視点から研究がなされてきた。ただ、変化の見えにくい近代の北京を対象とした歴史研究は必ずしも多くない。天安門広場を中心として、北京という都市の清末から中華民国期を経て中華人民共和国初期に至る過程を通史的に描いた本書はその意味でも貴重である。

本書が具体的に明らかにしたのは、天安門広場という空間が、王朝の宮殿広場から、革命記念日の儀礼会場、デモや集会の場、入場無料の緑地(北京のほかの公園は有料だった)、首都でなくなった時期の迷走、そして人民共和国の中心と、時期ごとにさまざま異なる意味づけをなされてきた曲折の過程そのものである。特に明清時代に宮殿と一体化していた広場が民国期にそこから切りはなされて市街地に帰属していき、人民共和国の下で宮殿に替わる新たな中心とされたという流れは本書の一つの軸となっている。

この空間という分析視角は中国近現代史研究ではあまりなされてこなかったものである。ほかにも本書における、明清の天安門広場の「T字プラン」と王朝儀礼の空間としての南北の「中軸線」、西単・王府井大街・正陽門大街という三つの商業地を結ぶ動線としての天安門広場の開放、集会で祭壇や演説

台が広場の南北・東西空間が交わる金水橋前に置かれた意味、T字路+緑地帯と見なされた広場が一つの空間的まとまりと認識されなかったこと、人民英雄紀念碑や毛主席紀念堂が伝統的な南面の形式ではなく北を向き、かつ中心軸の動線と視線を遮っていること、南面する天子の視線として紫禁城の南にのみ伸びていた中軸線がソ連専門家の意見で北にまで延長されたことなどへの指摘からは、建築史の門外漢にとって、北京と天安門広場に対する新しい視点を得られたと感じられた。

個々の部分について見ると、第2章で北京政府期に天安門広場で起きた出来事を報道から集め、デモのコースを類型化・図示して分析したり、第3章で1920-1930年代の北京の緑化具合を示すのに同時代のエッセイや写真、絵画を多用したりしているのはやはり本書の特徴的な手法と言える。また第5章第2節の人民英雄紀念碑の設計過程や意匠に対する分析は建築史家たる著者の真骨頂と言うべきもので、非常に具体的かつ生き生きとした記述となっている。この碑が革命史と共産党の統治の正統性を示すものであると同時に、天安門の象徴する伝統や現政権と対峙するものという意味も含み、それゆえに第1次・第2次天安門事件の舞台ともなったという指摘は刺激的である。第5・6章は著者の梁思成・「社会主義リアリズム」論として読むこともできる。

本書を中国近現代史研究の文脈に位置づけるとするならば、もう一つの関連領域は、シンボルや儀式を通じた国民の愛国心、政権への忠誠の獲得という政治文化に関する研究である。この国民形成という点において、本書は天安門広場という空間の利用について、近代以来の連続性、1949年前後の連続性を強調している。このテーマはかつて評者も扱ったことがあり、また本書が参照しているように中華民国史からの研究も多い。

ただ、この分野の研究には一つ大きな課題がある。つまりこれまでの研究で、清末から中華民国期の知識人や政権が、欧米や日本のモデルを導入し、天安門広場を含む、国家シンボル、国家儀礼、記念建築や記念品、教科書その他のさまざまなメディアを通じて人々に国民としての意識を持たせ、統治の正統性を獲得しようとしてきたことは明らかにされてき

た。ただ、それが働きかけの対象となった一般の人々の意識を実際にどの程度変えたのかを知ることは非常に難しい。むしろ多くの研究が、さまざまな理由から、日中戦争期も含め、中華民国期には以上のような試みの効果は限定的だったのではないかという認識を示している。一方で2000年代以降の中国国民に広範なナショナリズム感情が存在していることも間違いない。このため、人民共和国の下で国民意識の形成を目的としたどのような政策がなされ、それがいつ、どのように人々の意識を変えたのかが目下の課題と言える。

この問題に関して、本書は民国期と人民共和国の連続性の一方での違いを次のように述べる。つまり、民国期の天安門広場におけるさまざまなアクティビティはいずれも断片的・散発的であり、それが安定的・定期的に保持されることはなかった。一方1950年代には建国セレモニーを雛形とする祝祭が標準化されて定期的に反復され、それによって国民の共通の記憶、「想像の共同体」が形作られていった(270-273頁)。これは一つの仮説と言え、現在中国近現代史の分野で行われている、共産党の権力の基層社会への浸透過程に関する研究と合わせて検証することで、より深い知見が得られるのではないかと考える。著者の今後の研究のさらなる発展に強く期待するとともに、本書の問題提起を中国近現代史研究の側がどのように受け止め、生かすべきかを真剣に考えたい。

なお本稿校正中に、本書に対する吉見崇の書評を得た(『中国研究月報』第75巻第5号、2021年5月)。合わせて参照されたい。

(筑摩書房、2020年8月刊、A5判、473頁、4400円)